

中期ハイデガーの芸術論における「全体における存在者」とは何か

木下 由裕 (東京大学)

本発表の目的は、中期ハイデガーの芸術論における「全体における存在者 (das Seiende im Ganzen)」を「世界 (Welt)」と「大地 (Erde)」として解釈することの妥当性について検討しつつ、1920年代後半の「メタ存在論 (Metontologie)」を構想していた時期の「全体における存在者」と中期芸術論におけるそれとでその内実が異なることの意味を解明することにある。

そもそも「全体における存在者」とは、1928年夏学期講義『論理学の形而上学的な原初的諸根拠——ライブニッツから出発して』においてハイデガーが「メタ存在論」の構想を抱く中で主題となり、その後30年代に入っても使用され続けた概念である。1928年夏学期講義では、存在を理解する可能性の条件は「現存在の事実的実存」であるが、この「現存在の事実的実存」の前提として「自然の事実的な存在 (Vorhandensein)」があり、この「自然の事実的な存在」を「全体における存在者」として主題とするのがメタ存在論である、とされる。この時期の「全体における存在者」は、現存在がそれを超越するところのものではあるが、現存在が超越して向かう先である「世界」を含むものではない。

ところで、諸先行研究には、この「全体における存在者」の内実は20年代から30年代のハイデガーの思想において一貫したものである、という暗黙の前提があった。そうした先行研究は、「全体における存在者」を一貫して「世界」を含まないものとする解釈と「世界」と同一視する解釈との二つに大別できる。しかし、本発表が見るところでは「全体における存在者」の内実は時期によって変化している。1928年夏学期講義とは異なり、中期ハイデガーの芸術論においては、「全体における存在者」が「世界」と「大地」と言い換えられていることからわかるように、「世界」という契機をも含むものとして「全体における存在者」が把握されており、芸術作品は「全体における存在者」を顕わにする特異な存在者であると考えられている。このような変化をどのように解釈すればよいのだろうか。本発表はこの問題に対して次のように答える。すなわち、ハイデガーは、前期では「世界」は人間が形成するものと捉えていたのに対して、中期では「世界」が根源的には非人間的なものから立ち現れるものであるという見解に至り、「世界」を「全体における存在者」に帰し、「世界」がそこにおいて立ち現れる場として芸術作品を捉えたのだ、と答える。

本発表の意義は、先行研究が見落としていた「全体における存在者」の内実の変化の意味を解明し、それを通じて、ハイデガーの前期から中期の思想の移り変わりの一端を、主に彼の芸術論の検討を通じて示す、という点にある。